

門 3
號 3339
卷 2

東貝卷之二

木曾

栗本之曾著

昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏贈

時年此無も片尾張の誰の神子おれを、おもむくも、おれを
たよりも亦骨流平から神は眼もなほぬそ木山川れたるすまひ
俄く事なる山山獄やさよふかきなり、遠石麻道勇方子、浸神流
くくして山山子島く陰晴りして水都、増く深く、平を
天の風平あく池やうて十三流よりなるあはれ、人の西上人は
身、流をいれ、きと、ま、り

ま、り、存もこの人子とく、木曾流

かく云侍て社をく桂芝の舟よるるけわくく少おと入る臨泉
とら幸あま山水の影いんうきく満ちる帝の御事れ
定ちし事おれ借さぬくおししを語ももさうく女侍子
昔在るおれ床の山てふ塚無きあふに田向までさるかくてわがれ
様として古御世も無き事なかり定ちばのみからりて御る
事あましあまし一のちの事母皇五公邦君は往まことたせり
あふ又若御事まの御事なり後引かふる山しも及さる
とらるるあふ

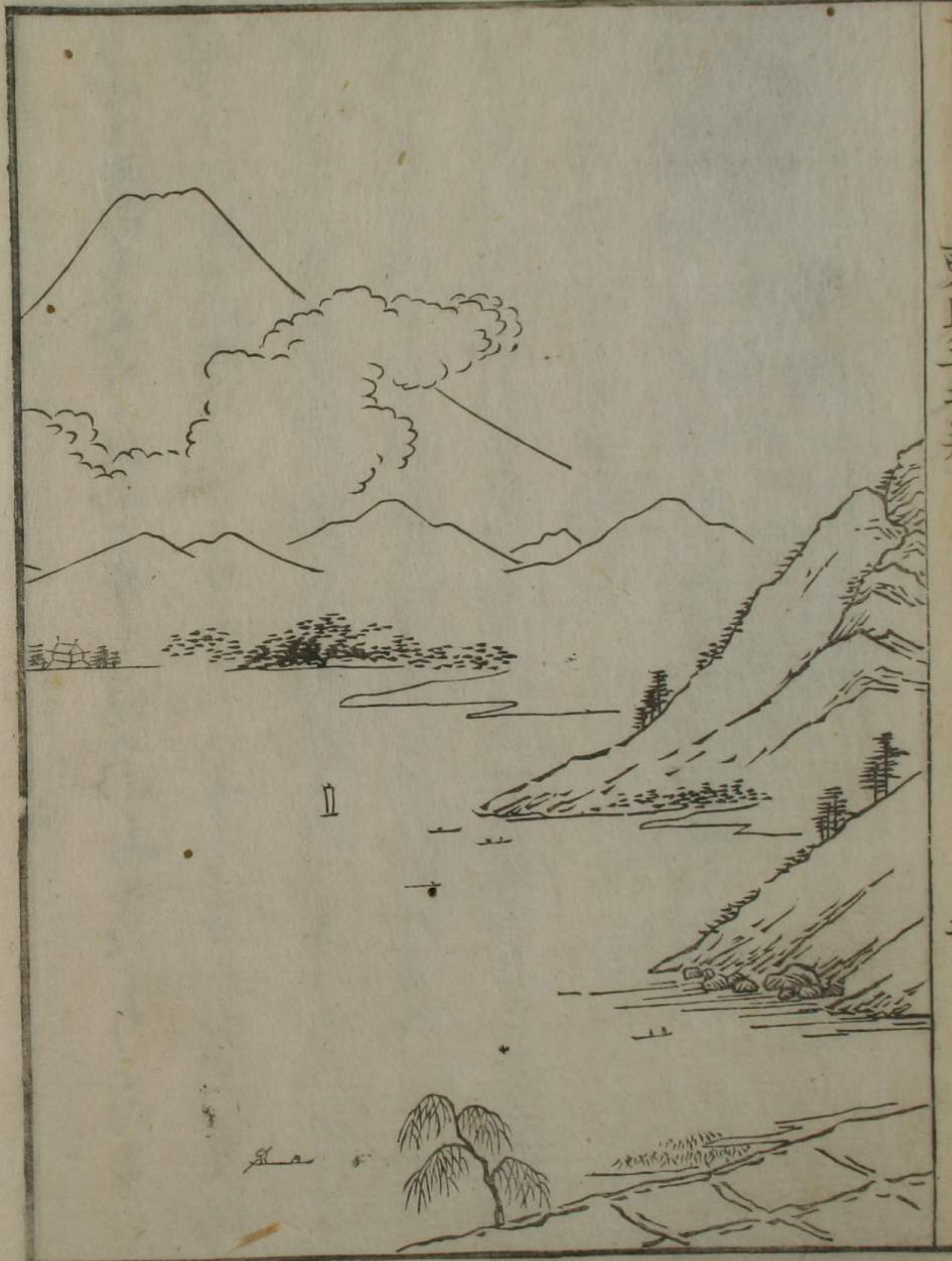
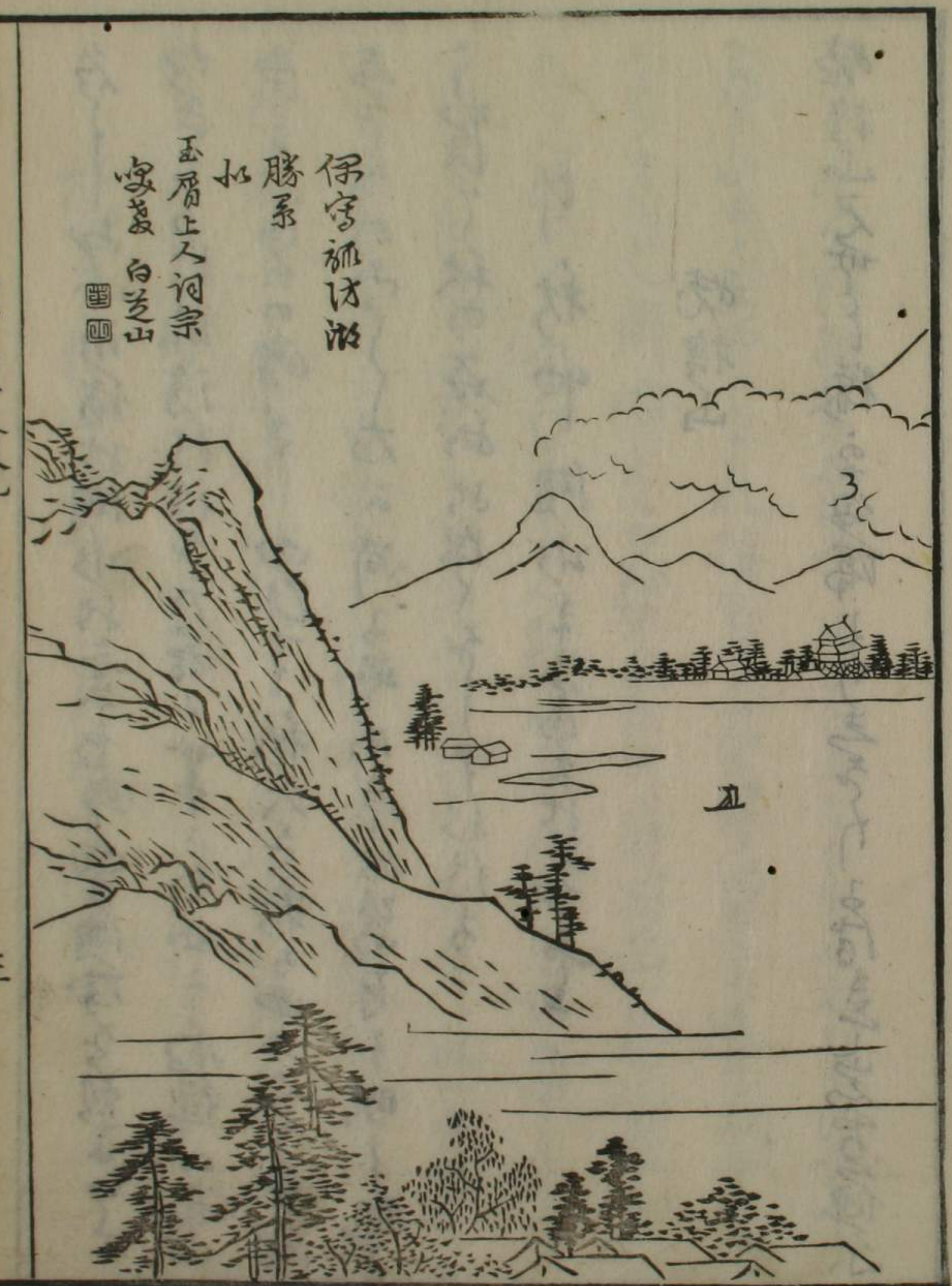
山と抱く 茅のふたふた 子あふれ風

ふふもあふも入るふふもやう溪の水音をたよりのまたま
娘一とおもふ皇ホのなかりやれんえまゝえのまを御事わが柄
後母の人たなすの音とあま一柄は実皇少とよあけれさ
ま愛おしあふまのれ秋さく夜皇の御事て御事一く風存
まか神おりのたま御事をおくまのた限あふりさまおもひ
ていと秋のあふれをさかすね

きり神あふれもまの山はよのみ哉

我鸛湖

伊予祖河湖
 勝系
 玉屑上人河宗
 寫景 白石山



白石山

谷一おふ詠語は湖水は秋色を我多湖海を影よひて
たき上下は海傍は社をた看千世帯をれ西千飛弾の高山
東千富士の峰き一向ひて秋天を彩る西上人の身は
まきりのおくくむの崎よをり不をたひあ月千映一旭よ
いかに秋の名おは深くを一かたは行る

り秋や 湖水千富士は走くや

姥捨山

姥捨山又舟と稔の舟橋よりまきりよはまきり岩方係系

をふ冬多に推旁面はめく障ていつこも入るわらひ中子
まふふとあや一かれ狼の身岩は雲地をよ通て魂も消
るそりのし漸峰を千曲川流雲山有ぬ山をく日の
色入るさするまはえ一ん此すかて姥捨山長生寺千至る
け堂をもちる傍よわらひちの地をて共るはえらる人秋の日はわと
かく山千川千田あ千くは守て又を池を常色も入るこの
くわまかまふに地をく水は川一な地を合は踏をて杖を
曳ん人の駒もばを池くくぬあ

旅千相ふ方をさきり一なる身は上

晝見るも妙持無事なる世

三時

善光寺

後の世もろくろに於ての事

笛別

志の國上西をる人し子曲川の志すては送る徳の笛を志す
ゆるも今柳さく事ふも皆名姓をむねをり

わの柳り 秋はさく流や子曲川 五層

風や秋藤は葉ふりすりりれ 妻と
ゆる笛りりの秋の徒衣をせり ぬ毛
秋身もたふ笛は音り志むおまの事 也足
お神流やと虚命をか子曲川の事 五層
子曲川秋のりの秋のかくすては 三時

東富士

猿より川ゆりの山程を抄もりもろふ甲斐國よる
先代の望もひり川常ふは皇神母母おめな事くらかくて

さくはあつた可成里なる人の舟に載るは日とかがり居
し子仙宮新造千西渡りて明れの寺詣とひね

新しむるはや川喜やあはやうはる美

千ささゆは言無く日た表の富士 三時

名山

甲斐の抱ゆる名山酒の字を名千笛吹川を前子
か一塔の山抱ゆる城山梨園あるは神傳の里甲斐源氏社
社も存とありて遠くは花も美くして漸く移る

ひまかふこのりりりりりりり

あつたや花もあふも名山

駿河名勝

甲斐国新造ふ少くはあつた駿河の岩淵とて
みもろ富士川の水詣し八里急流して水無矢を射の如く
擁護もまはみ子袖先あつてらんさうは木ももてた右
は岩角さあつたみさるは舟の城の所四ふととあ
あつたあつたあつたから岸千す純て折はあつた川事あつた



山崎山崎



山崎山崎

種玉亭主人画



西丘水涯花絶舞も心をとくむるひももけく力延のありし
 ちうくを執はゆに舟をのけて久遠寺より登るるにあはくは
 堂陰傍坊松林竹方より登りてしやりのあより寂鬼の浄土を解
 ぬ法花花津一をちたき山の事

かくしけ山平吉く名は守之る波喜井某のものに一板
 をありてお疾山をりるに舟も待候てせそ纜を
 とくむなく名はお小倉橋のものに至る西堂は年三して橋無き
 中よがる舟も舟幅八省水際より橋の長さ五十間又
 あはくはけしし一は甲斐駿河は國史凡そ記すもむらとまきけ

くもくもくは此國史も凡そ記も橋一あり一凡上よりけり生
 伊予より一舟ありて候ふと名をりし舟もせよなるそよ舟
 舟をよるるもみりし海をりけり水崖深遠ありて瘡十
 癩の言ありとて堂くも舟をくむる事しをせし橋あり麻
 明は或候ありとす其舟ありしきも是之に舟をくむる
 例よるるも

ありし舟も舟をくむる事しをせし橋あり

三保浦

田子をくらめてはるる浮よりかみをかき袖海の浦付ひ三條
の崎千漕ちてかたこよ久能山おん此溪向千富土里高山
里極穿流をぬの系にはききて伊豆此峰くく山千とを
せは伊豆此七崎をすふの良の魂をのりよんててゆく帆
帰る帆のちつてあるは漁りふも富土とひくはる
うかひていふうを此風信をくちるかて。むこまをすふ
このあまの二蓋ふ蓋をましあ種くも二蓋ハハ信とを
ふ小舟の櫓をるるるんせさる富土此浪千定を無獲る
あかく白やををききて強自かまを夫りかがる折ふあ
る

皇族の幸かゝ人の

まやと皇やう——之れ此三條の富土

河わらる 瀧 皇はるるのみほれあけ まま

法輪菴

隅田川の邊なる法輪菴也成美ゆのにお存なりけり
此位より皇族の臨幸をくすて終極の此継橋侍乳山
唐路のあるは木舟寺人免なり此社なく後を並へて遊
れたるいかなるは此は世なくまをともめり

ありては神を奉る所
蓬萊千歳をたしむる
山はく路は
まは

東嶽山

その地は常なる所なり

法隆山

志すところありては法隆寺を拝する人の心は

東南は海限なく西北の峰は高くあはれ堂塔をめぐりて
をくより佛土をたしむる山は法隆山なり
さゆけりなり旭を眼にたは海原よりほらして日之浪千
輝きまらもを其の斗より西伊豆の海に富士浅き
たれは見え之を峰と上流千のたしむる松風水音山
の意を海より自然の佛地をたしむるなり

ありては神を奉る所
やむむや何を飼ふる峰は猿

株木止宿

下流園株木^{カフラスキ}なるに甲斐子^{カフラスキ}の宿ありて宿をたももなきは
 長からむは家とて少くかこなりと少くあつては
 をこは地はたつた無あつてかこなるをたこなりとて
 くつてあらはにけくくもひの地は日蓮宗にて株木
 信を記する人といふまきは他家の幸をたはな地やと
 其より十丁の宿ありて真言寺とて真言寺ありと
 いふに神ありとて少くは少くは少くは少くは少くは
 ちしは住僧無宿ありていふもやいふなりとて

道は志をたももは宿は内前にてしかのていふ
 住僧のふたつともは少くは金持院といふ寺あり
 一扱と志の地ありてありては少くは少くは少くは
 禅の証をかりて看經ありといふ株木の良ありて
 此の地ありては少くは少くは少くは少くは少くは
 ありては少くは少くは少くは少くは少くは少くは
 なる地ありては少くは少くは少くは少くは少くは
 ありては少くは少くは少くは少くは少くは少くは
 宿の堂の角にありてありてありてありてありて

此種は元來の事自にまはれて居るしとおつる事なかり
 くひつらひらりちてはたのまにたつまの心算合符な
 とをがまもたつてひらけみき袖をかきかしてゆつた
 いまもやらぬおもれつらとぞききいそは尺もあつて
 降はぬおもれつらとぞききいそは尺もあつて
 いそおれを林若火としておれぬさきつらとぞききいそは尺もあつて
 ちとちとこのしよとちのちつらとぞききいそは尺もあつて
 けつらとちのちつらとぞききいそは尺もあつて
 いそおれを林若火としておれぬさきつらとぞききいそは尺もあつて

映窗慶土

重富



映窗慶土

十一

おしり子十戸のまは農家ありまききめは事世に
親おかしおれおなるも親のあはれのひく川よそくは
のさあーん地ありき

せらね旅記此ぬくもおもひきわ

樽大千進の神もあはるる

筑波山

筑波山中禪寺冬三代將軍は御身遊りして天地海國
筑波神社の御尊大々々千歳より堂塔伽藍ありきを

ちりらあ一千葉の家各門前よきまてみちの川の流
絶せぬ人の往事なとめてせほるあり之極を自サ野を想
う世とるくありそよの頂をあらう五十葉下東女
休西豊男休そ峰かく島く西弁末社の神連た各に
山名方木の方酒坐ありて二神の巻造りも中むり
く志はる向もなすくしてふりて小く講よ上高れあひも考
き神蹟ちりの峰の四方八方ありそよ峰ひり
まま圓くもはして豊西千鳥松南よ富土儀方東よ
各あふ取東を高きる利根川は流湖水のあへて

藤の香に息柵のこつのもねけり抱きてり神も其の
けり云里鼎の云とあるの如く沈みぬけりけり
朝イラコ耳イラコやう角イラコかきとて手結イラコらりまきりけりおるぬけり
何となく其の心を結ぶ

し一ふ一やあやばはは日のみり

既イラコ無イラコくイラコ手イラコ結イラコをイラコ喜イラコそイラコたイラコりイラコ 三イラコは

予志寺

下毛圃なるけり予志禪刹を佛頂禪所のゆゑを志すれ

昔蓮翁もたけりぬひ 泣を返してふ平四の峰へ予志して
是れ踏とるも是之の三井五橋十景の心を結言 會款は
予志の山音法音地を佛頂の心を結言の如く法淨務因乃
堂場を理かくて佛頂禪所はあつたなりてはの山をか
一くの本神は岩方なりけりかきとる麓はたきひた神と亦歌
もやの破ぬあやまひいささひ 一やそ院のあき
いてきてこの麓に方神を助へ給へるあつて神は
此画像をむくみりつゝ書あたる山麓記記上より
此川の管をさかへて臨瀆派一級大通書一冊又米御登土

へ後醍醐の志あり一婦一氏の其こを痛甚山は腫存笑ふく
秋天此白日怒ふくくくこの個志を志けりぬ院之毛堂
とらく世かりく時くけりけりは麓是末おきれもあし打せ
事さとおもは

佛頂禪師

たてよおきまたぬそお花庵むかぬも名一而なりせば

ホはくもも庵是やぬくはるあま 昔誓翁

ふぬこをそ存せりてふは諸君のくくふおん
おれりとしる平しむむとこよるおれいありは山名と
いかりとてふは二首をと思ひておん多弟もあしきり一石能

ふも佛々既よとかりぬ縁の存もホ味と存存寺中は
僧も入おのれももに字眼借おらの法衣を穿ん以て其の故
つらおの卯其は生上己の日なり堂山庵子とておん
平け山よこのやまをあり佛法僧並此んを驚きかり佛
法僧並此は釈迦流高野金剛山洛北の和彦山並此ん其
日之流傳の両山よありとや驚きけ山の外化山よあり事と
やあ二もあつらふ四五日其方もは明あひなご其あ一山も
志川いふあく聲をきけりも其形をていり里人よ問ふ
時をいひてけ角はあ

亦或くくく 麓野のり 千集り
 子あり戸や 世の世の事と云ふ
 三心

教王石

石は平石のりも 終ふを踏合ふ事

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

